

## 大学から高専そして技術経営教育の体験の中から

—「教え育て、教えられ育てられること」を思う—



筆

岩田 一 明\*

### はじめに

2001年の夏、土佐の高知は「よきこいまつり」で町中が燃えていると、連のなかで歓踊する広末涼子の姿を捉えながら、テレビは伝えていた。猛暑の中、人々は鳴子の囃子に浮かれるように踊りまくるのである。体の底から湧き出るようなきうきとした気分は踊りの輪に加わったときに感じられると町の人々はいう。昨年(2000年)の夏は勤務先であった高知高専からも学生達の連が繰り出していった。踊り疲れ果てて戻ってきた学生達は口々に言った。この夏の体の隅々から噴出した汗と表現しがたい快感と満足感生涯忘れないだろうと。

阪大から土佐の高知に設立された高知高専に赴任したのは1997年、4年余前のことである。個人的に、土佐を意識したのは古く、紀貫之によるわが国最初の仮名文日記である[土佐日記]を教えられた頃に遡る。土佐日記は紀貫之が国府として土佐に4年間滞在し、その経験をもとに、京への帰途を旅日記風に纏めたものであることは周知のところだが、日記の行間に溢れる情感に惹きつけられたものである。西暦935年の執筆であるから千年余も昔のことになる。彼の時代とは自然環境も社会環境もすべてが変化しているとはいえ、心の襲に触れるものがあるのではないか、もし可能ならば[新新土佐日記]とでも言える思い出が育めないかとの思いを抱いての高知への出立であった。

高知での思い出は都会のような華やかさも喧騒さ

もない。しかし、地域に根ざした特有の薫りが残っている。学生の出身地は高知市を中心とする中核地域に集中する傾向があるとはいえ、なお多数は全県に点在する。県内とはいえ、地域による特徴も決して少なくはない。そこで、出きる限り彼らの育った風土を肌で感じる努力を重ねてみた。その独特の文化とでも呼べる風土を理解することが大学教育とは一味違った、高専教育の第1歩だと思ったからである。その中から2,3の思いを紹介してみたい。

[高知は海の国である]と信じていた。東西約300kmに及ぶ海岸線を地図でみてそう勝手に思っていた。現実には長い海岸線は急峻な深みと溶岩などの隆起などにより、遊泳可能な砂浜をもつ個所は極めて少ない。観光地で有名な桂浜も遊泳禁止である。毎年海浜が減少することを防止するため、砂の補充が行われ、また海岸線近くにはテトラポットが並べられ、自然の変化を防止するに懸命である。台風シーズンになるとテレビの高波スポットとなる桂浜の突端部もコンクリートで堅固に固められている。海岸線の近くには山や丘陵が覆い被さってきており、平野は少ない。住んでみると[高知は山の国]という印象を深める。

高知を語る時、「坂本竜馬」や「かつおのたたき」を挙げる人が多い。坂本竜馬ほどすべての県民から愛されている人物はいないのではないかとの印象が強い。どこにいても老若男女を問わずである。その背景には、司馬遼太郎の影が色濃い。いわゆる司馬史観の浸透である。年に何度か恒例になった学生への校長講話でも、ついつい坂本竜馬、ときには武市半平太、後の瑞山の例を引くこととなる。そのとき、学生の眼差しは一瞬変化するのを感じる。学生のほぼ100%が地元の出身者ということが関係しているせいかも知れない。歴史上の先人の行動や思考が若者にはとくに強く影響することに留意する必要性を痛感する一瞬でもある。



\* Kazuaki IWATA  
1934年9月23日生  
1964年京都大学大学院・工学研究科・  
機械工学専攻(博士)修了  
現在、(財)国際高等研究所フェロー、  
大阪大学名誉教授、工学博士、生産  
システム学  
TEL 0774-73-4000  
FAX 0774-73-4005  
E-Mail iwata@ias.or.jp

地域を支えてきた第1次産業は相対的低下の一途をたどっている。漁業もまたしかりである。しかし、かつおのたたきは現在に至るも、衆人からこよなく愛され続けている。かつおのたたきは初かつおの頃が旬と思っていたのはとんとした見当違いであったことを着任しばらくして知る。年中、食せられるようになっており、旬のシーズンという感覚は古いのかも知れない。ただ、近場でとれる魚類は旬の時期のみ店頭並ぶ。その魚眼の生き生きとした美しさとその味は格別である。

かつおに絡んで、個人的に執着した土地に、久礼湾に面した大正市場がある。高知県を代表する国道は32号線、33号線、55号線、56号線の4本であるが、足摺岬や中村市、宿毛市に向かう56号線を高知市から車で西に走ること約1時間半ぐらいのところに、この市場はある。ここでは休日でも早朝に水揚げしたかつおを売ってくれるのである。幾度足を運んだことか数えきれない。なじみになる前のことである。かつおを依頼すると老主人は「今朝は天候が悪くて取れなかった。これは昨日のもので冷凍庫に入れていたもの。だから刺身には向かないから止めろ」という。往復3時間には換え難い、都会では忘れられていた暖かさを教わった気がしたものである。こんな風景に山村では幾度となくぶつかる。誠実な思いやりの空気が残っているのである。

純朴な気持ちをもった15歳の学生が年度の始めには入学してくる。そして5年後には本科を卒業し、さらに専攻科に進学する学生は大学学部と同じ22歳で終了して、社会や大学院に進学していく。卒業式当日は教育者として少なからず生甲斐を覚えるものである。ただ、約160人の卒業生一人一人に証書を手渡すのはかなりハードな仕事ではあるが、高専の教育については多くの先輩のかたがたが折につけて執筆されているので、詳細は省略するが、私の思いは次の言葉に尽きている。それは「教育とは教え育て、教えられ育てられる」ということである。教育者の中には自分の知識と評価基準のみに準拠して学生を教え、育てる一方向に目を奪われているケースが、とくに高専の中では少なくない。学生一人一人が持つ素質、感性、学び方と進捗状況などを真剣に把握しながら、学生から教わり、育てられているという気持ちに心して見たいものである。

専攻科の設置、海外大学との提携、参与会の創設をはじめ、ハード、ソフト両面で、当初の公約が完

了した2001年3月、紀貫之と同じタイミングで土佐を後にして、第3の人生の棲家とでもいうべき法隆寺の近傍の拙宅に落ち着いた。

その頃、関西では企業における技術者教育への新しい一つの試みが始まろうとしていた。巷で最近話題になっている、「ビジネススクール」に絡む教育についてである。企業に就職した技術者は経験を経て多くの人が経営者のグループに近づいていく。その際、技術者は最新の経営の基礎を修得することが不可欠となる。従来の大学における工学系教育のなかでは一部の例外を除いてビジネスの基礎は殆ど扱われていない。このため、技術者役員を指向する人々にどのような教育を行うのが必要なのか、という問題提起とともに、そのアクション・プログラムの作成が迫られていた。キャッチフレーズのいうならば、「技術者が経営者に変身するとき」であり、[Management for Technological Business Innovation]や「Management of Technology」の基礎素養の教育についてであった。

2001年7月、けいはんな学術推進機構主催の試行プログラムが実行に移された。一週間泊り込みの集中型教育である。参加者は26企業、26名、講師陣は米国マサチューセッツ工科大学(MIT) sloan business schoolの教授2名、東大経済学部教授、神戸大学経営学部教授の合計4名である。このほか、MITエンジニアリングスクール教授、MITビジネススクール教授、東大工学部教授、神戸大経営学部教授と筆者の合計5名が企画評価メンバーとして参画した。

試行の詳細について触れる紙面の余裕はないが、結果は国際的に見て「かなり高いレベルでの成功」とされた。なお、ご参考までに技術革新と企業経営に関して興味あるテキストを以下に、2冊のみ記しておきたい。すなわち、

① クレイトン・クリステンセン(伊豆原弓訳) :

「イノベーションのジレンマ」 翔泳社 2000.

② J. M. アッターバック(大津正和, 小川進監訳)

「イノベーション・ダイナミクス」 有斐閣 1998.

である。

技術経営セミナーは「教え、育てる」こともさることながら、「教えられ、育てられる」という輪廻の重要性を痛感するに十分な体験である。この種の活動は今後ますます価値を増すに違いない。同時に、企業の事業評価にかかわる経理面、会計面での基礎

教育も避けては通れない。ROI, ROA, EVA, また、インタラクショナルコスト、インテリクチャル・キャピタルなどについての基本的な理解が次々と求められてきているからである。

このような技術者教育をお手伝いすると同時に、平成13年4月から、けいはんな学術研究都市にある〔財〕国際高等研究所でフェローとして研究に携わっているが、その内容にほんの少しだけ触れさせていただけたい。それは今後多くの方々にお教を請いたいと願っているからである。国際高等研究所というのは、20年後に学問領域として重要になりそうな研究分野は何かを研究することを主目的にするところと教えられた。研究所の所長である、金森前阪大総長からである。

今の私の思いは長年、関心を持ちつづけてきた「スキル」の解明への願望にある。スキルと一言で言っても生産現場の技能といったハード的事象から、設計、マネージメントのスキル、インタビューのスキル、さらにはリーダーシップスキルといった、広義のソフト面まで含めて該当範囲は広い。日常生活における箸の扱い、赤ちゃんの寝返り、スポーツ、音楽、芸術、工芸の熟練など、また、生産分野の各種の技能などなど、枚挙のいとまのないほど例は多い。そして、これらのスキルは、すべての人間が程度の差はあるにしても保持しうる可能性をもった能力といえるであろう。

では、「スキルは何が分かれば解明されたと言う

ことになるのだろうか？どんな仮説を設定し、どんな証明をすれば分かったことになるのか？。そもそも仮説の設定は可能なのであろうか？。」こう考えると解明したい問題が山積しているような気がしてくる。そこで、スキルにかかわる問題のアーキテクチャーを整理することから始め、最後はもし可能ならば[スキルの科学]、さらには「スキル学」といった分野の誕生に繋がらないだろうかと夢をみる。

最近、まず、技能関係からスタートすることとして、その道の名人、あるいは達人に教わることを勝手に決めた。第1段として、2001年5月より、伊勢神宮の遷宮を指揮した「大棟梁」への訪問を開始、技能の考え方、大棟梁が自分のために作った数百種類のカンナなどの道具作成のポイント、後継者への技能伝承についての提言などを教わっているところである。読者の中でもし各分野の名人や達人をお教えいただければ幸甚の限りである。

大学教育、高専教育、そして企業の技術経営教育などを体験して思うこと、それは「教育とは教え、育て、そして教えられ、育てられること」である。これは故松下幸之助の教育観でもある。そしてこの教育にあたっては、暦の年齢、肉体年齢、精神年齢、いずれも大切であるが、より重視したいと個人的に思うこと、それは情熱年齢である。今後、せめて情熱年齢だけでも青春のままでありたいと願っている昨今である。

以上

